国指定史跡

# 武蔵国分寺跡
# 附東山道武蔵路跡

－　平成２１年度　保存整備事業に伴う事前遺構確認調査　－

僧寺伽藍中枢部（南から）

２０１１年3月

国分寺市遺跡調査会
国分寺市教育委員会

# はじめに

武蔵国分寺跡は、全国の国分寺跡と比べても規模が大きく、その歴史的重要性はつとに認められています。寺院跡は古く大正11年に中心域が国の史跡指定を受け、その保存が図られるとともに、部分的な調査や整備が行われてきました。

国分寺市では、郷土の歴史を語り継ぐよりどころであるとともに、豊かな自然を残す場として市民に広く親しまれてきた武蔵国分寺跡を周辺の都市化から保護・保存し、史跡公園として整備・活用するための環境整備事業を推進しています。

事業は、市の付属機関である国分寺市史跡武蔵国分寺跡整備計画策定委員会での審議を経て策定した保存管理計画と整備基本構想、整備基本計画に基づいて施行しています。

旧整備基本計画（平成2年度策定）に基づき、平成4～14年度に施工した尼寺地区整備事業に引き続き、新整備基本計画（平成14年度策定）に基づいて平成15年度から僧寺地区の整備に伴う事前遺構確認調査に着手しています。並行して市立歴史公園史跡武蔵国分寺跡（僧寺北東地域）、同（国分寺崖線下地域）を開園し、新たに新整備基本計画に基づき、史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）整備実施計画が策定され（平成20年度）、また，平成22年度には東山道武蔵路跡が追加指定され、国指定史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡となり、さらなる史跡保存整備事業を推進しています。

# 例言

1．本書は、東京都国分寺市に所在する国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡の僧寺地区の史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査の平成21年度概要報告書である。

2．発掘調査は文化庁と東京都の補助金を受け、国分寺市教育委員会が調査主体になり、国分寺市遺跡調査会が調査を担当した。

3．「調査に至る経過と調査計画」、「僧寺跡の環境と既往の調査」については，国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会2006『武蔵国分寺跡発掘調査概報32』を参照されたい。

4．発掘調査から概報作成にいたるまで、文化庁・東京都教育委員会をはじめとする諸機関、諸先生方にご指導、ご助言を賜り、また、地元住民をはじめ関係各位のご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

5．遺構記号は下記の通りとし，Pを除いて第1次調査より連続番号を与えている。

SA　塀跡・柱列跡　　SB　礎石建物跡・掘立柱建物跡　　SD　溝跡　　SF　道路跡

SK　土坑　　SI　住居跡・工房跡　　SX　特殊遺構　　P　小穴・小柱穴

6．平成21年度の調査体制は次の通りである。

**【役員および監事】**

| | | |
|---|---|---|
| 会　長 | 坂詰秀一 | 国分寺市文化財保護審議会委員長 |
| 副会長 | 関口雄基臣 | 国分寺市文化財保護審議会副委員長 |
| 理　事 | 星野信夫 | 国分寺市長 |
| | 内田　修 | 国分寺市教育委員会委員長 |
| | 松井敏夫 | 国分寺市教育委員会教育長 |
| | 星野亮雅 | 元国分寺市社会教育委員 |
| | 北原　進 | 国分寺市文化財保護審議会委員 |
| | 坂本克治 | 国分寺市文化財保護審議会委員 |
| | 遠藤慈郎 | 国分寺市文化財保護審議会委員 |
| | 小菅政治 | 東京都教育庁地域支援部管理課長 |
| 専務理事 | 本橋信行 | 国分寺市教育委員会教育部長 |
| 監　事 | 榎戸　潔 | 元国分寺市社会教育委員 |
| | 岡崎完樹 | 東京都教育庁地域支援部管理課<br>事業調整担当係長 |

**【武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会】**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委員長 | 坂詰秀一 | (考　古) | 立正大学名誉教授 |
| 委　員 | 藤井恵介 | (建築史) | 東京大学大学院<br>工学系研究科教授 |
| 委　員 | 佐藤　信 | (古代史) | 東京大学大学院<br>人文社会系研究科教授 |
| 委　員 | 酒井清治 | (考　古) | 駒沢大学文学部教授 |
| 委　員 | 松井敏也 | (保存科学) | 筑波大学<br>人間総合科学研究科講師 |

**【事務局】**

| | | |
|---|---|---|
| 事務局長 | 福田信夫 | 国分寺市教育委員会教育部<br>ふるさと文化財課長 |
| 事務局員 | 加瀬　勉 | ふるさと文化財課文化財保護係長 |
| | 中舎まり子 | ふるさと文化財課嘱託係員 |
| | 佐々木徳明 | 国分寺市遺跡調査会 |

**【調査団】**

| | | |
|---|---|---|
| 団　長 | 坂詰秀一 | 立正大学名誉教授 |
| 主任調査員 | 上敷領久 | ふるさと文化財課史跡係主任 |
| 調査員 | 小野本敦 | ふるさと文化財課史跡係員 |
| | 中道　誠 | ふるさと文化財課嘱託係員 |
| | 立川明子 | ふるさと文化財課嘱託係員 |
| | 増井有真 | ふるさと文化財課嘱託係員 |
| 調査補助 | 井口正利・小池和彦・平塚恵介・石丸あゆみ・大高広和・甲田篤郎・平原信崇・山本祥隆・大塚敦子・大羽正子・青山達夫・伊藤直美・佐々木義身・山口啓子・若林雅子 | |

【国分寺市文化財愛護ボランティア】

上村雄三・田中康敬・西原秀人・畑石重輝

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会現場視察

講堂跡発掘現場見学会

国分寺市史跡武蔵国分寺跡
史跡整備計画策定委員会現場視察

発掘体験教室・ボランティア養成講座

7．本書の編集・執筆は坂詰秀一団長の監修のもとに、中道誠が担当し、福田信夫、依田亮一、上敷領久、小野本敦、立川明子がこれを助けた。

# 調査区の設定

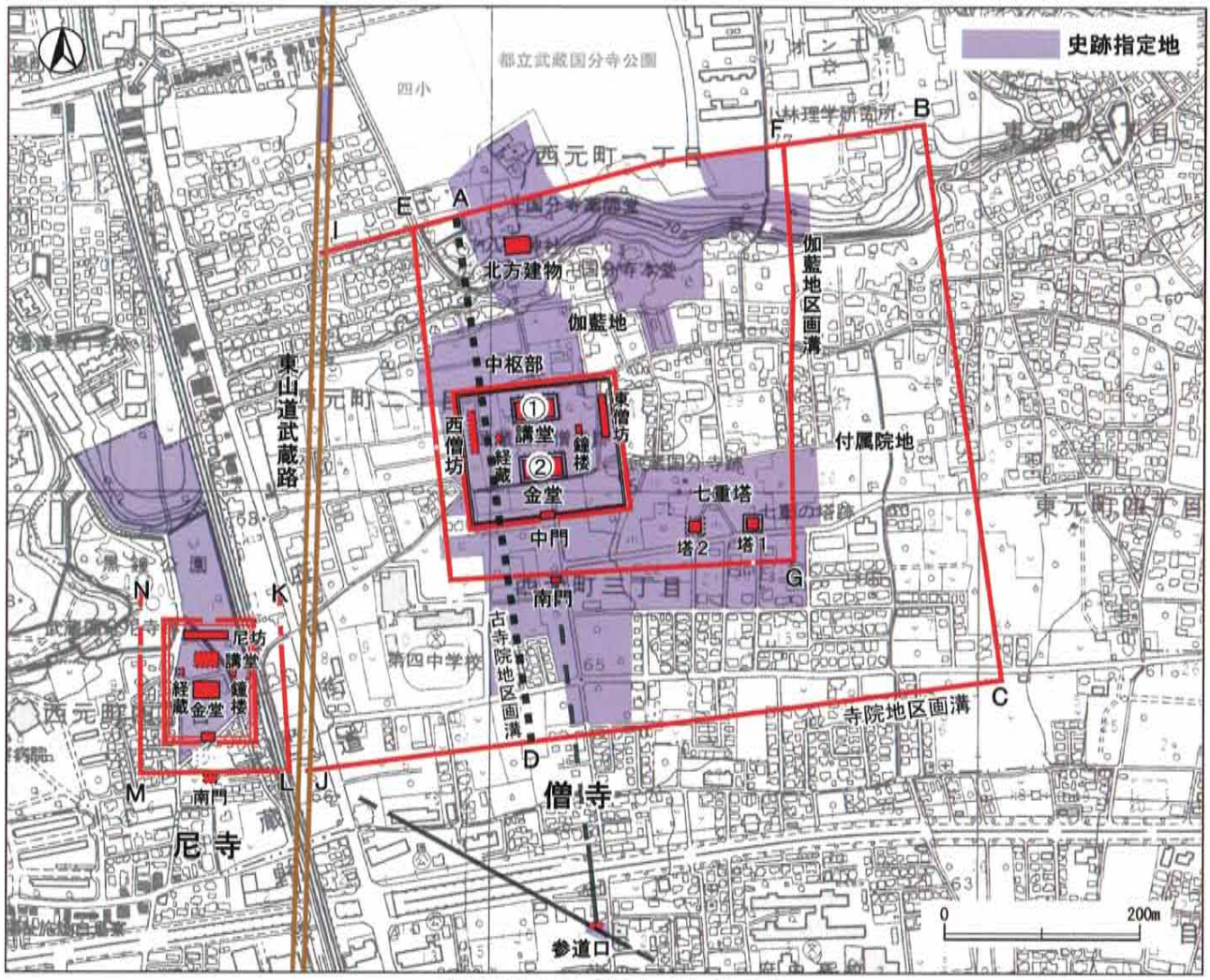
平成21年度調査は、伽藍中枢地区（講堂地区・金堂地区）を武蔵国分寺跡第650次調査として平成21年5月15日から平成22年3月31日まで面積675.6㎡の範囲を公有化地内において実施しました。

出土遺物・写真・図面等へは遺跡略称のＭＫを冠し、「ＭＫⅠ～Ⅳ－650－以下台帳番号、登録番号」のように註記してあり、全て国分寺市教育委員会で保管しています。遺物は瓦類を主として、土器類などが出土しました。

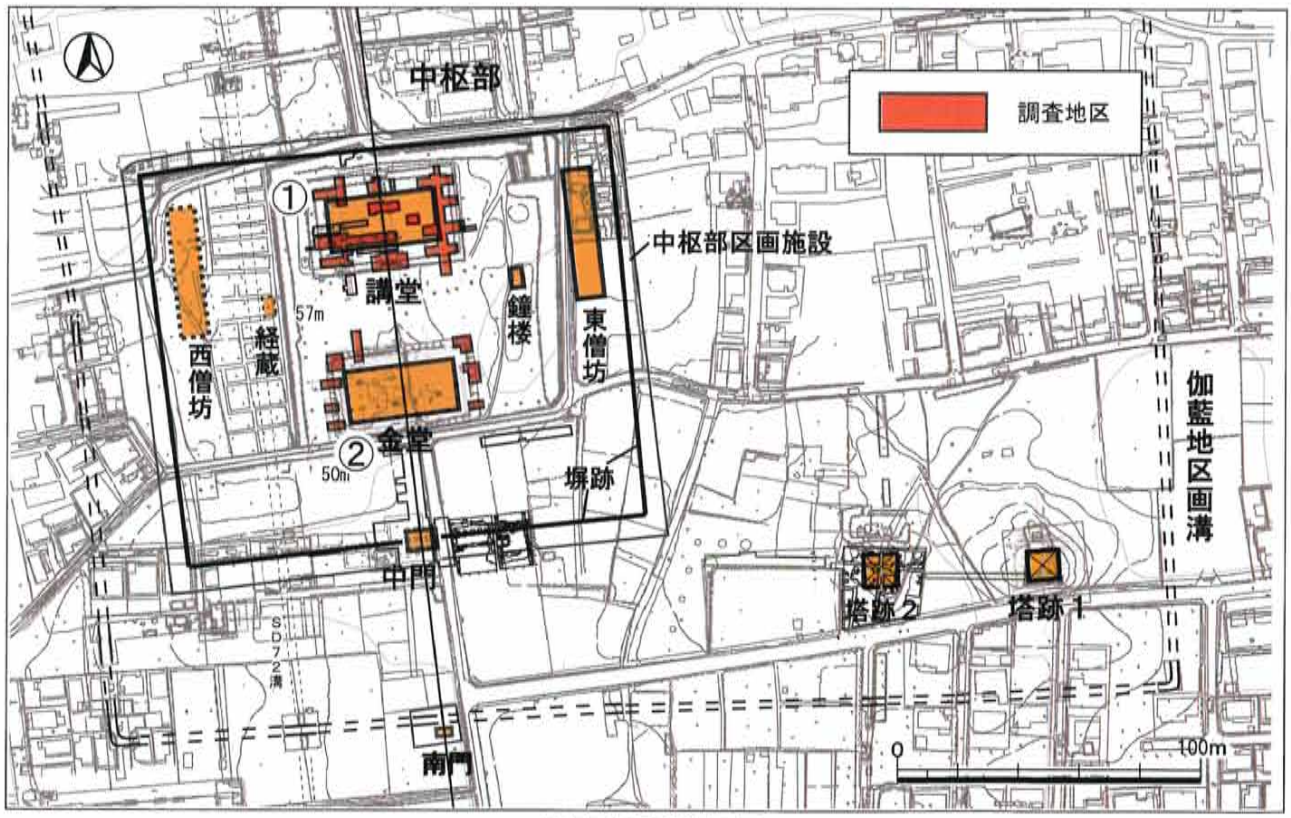
平成21年度調査区（武蔵国分寺跡第650次調査区）一覧

| 地点番号 | 地区名［整備ゾーン］ | 調査面積（㎡） | 調査地番（西元町二丁目） | 調査期間 | | 発見遺構 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 開始 | 終了 | |
| ① | 講堂地区（伽藍中枢地区） | 494.6 | 1609,1610-1～3,1619,1621 | 5/15 | 3/31 | 講堂跡１，不明掘り込み４，土杭２，小穴亜数 |
| ② | 金堂地区（伽藍中枢地区） | 181.0 | 2111-2・3 | 2/10 | 3/31 | 遺構確認途中（整備盛土・表土のみ掘削） |

僧寺伽藍中枢部（南から）




調査地点位置図（丸数字）




調査場所詳細図

# 伽藍中枢地区の調査

## 講堂地区の調査

### （1）調査区の概況

武蔵国分僧寺跡は、明治36年に重田定一らによって表面観察による礎石の分布調査がなされ、講堂と関連するものとして16個の礎石が報告されています。大正11年には東京府により、国史跡と指定される際に分布調査がなされ、講堂に関連するものとして礎石9個が確認されています。

その後、昭和31年度に、日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会により、武蔵国分寺で初めての発掘調査が金堂跡とともに行われました。講堂跡の西側が調査され、基壇構造や礎石の据え付け状況、基壇増築の痕跡などが確認されました。その後、昭和40年代に講堂跡の東側の調査が行われ、西側と同様に基壇の増築が確認されています（講堂跡東側は調査内容の詳細不明）。

保存整備事業に伴う事前遺構確認調査として、平成20年度から調査に着手しました。昭和31年度調査区を対象に、講堂遺構の位置、礎石据え付け状況、基壇規模や構造を再確認し、さらに、基壇東側に新たに調査区を設定し、創建・再建時の基壇の位置や規模、構造を確認しました。ただし、講堂跡の東側については、旧調査（昭和40年代）が実施されていることがわかり、平成20年度調査範囲はおおよそ旧調査範囲内と分かりました。

大正11年僧寺中枢部と国分寺崖線　南から

昭和31年度調査風景　講堂跡西側　南から

昭和40年代調査風景　講堂跡東側　南から

## （2）調査の目的と経過

平成20年度調査結果を受けて、講堂跡について、主に、①再建基壇規模および基壇外装の化粧材の確認、②建物位置・規模の確認および創建時建物の構造（切妻もしくは寄棟・入母屋）の確認、③基壇南北面の階段施設の確認、④創建時から再建時へ礎石据え直しの有無の確認（再建状況の確認）、⑤講堂の創建・再建時期の確認、⑥僧寺伽藍中軸線を確定させる情報を得ること、⑦平成20年度5区の補足調査などを目的として、調査区を設定しました。

なお、平成20年度調査の1区の一部、3-1区、3-2区の一部について、本年度調査結果との比較検討を目的に、再確認を行いました。

平成20年度調査風景　東から

## （3）これまでの調査の主な成果

講堂跡は西側を中心とした昭和31年度調査、東側を中心とした40年代調査、両者を含めた平成20年度調査を行っています。過去3回の主な調査成果は以下の通りです。後述するように平成21年度調査によって、加筆・修正する箇所がありますが、内容はそのままに記しています。

1．講堂跡は、僧寺金堂跡とほぼ同規模に建て替えられたことがわかりました。

2．建物は、創建時の桁行5間、梁行4間から、再建時には基壇を増築して桁行7間、梁行4間へと桁行を東西各1間分広げていることを確認しました。

建物規模は、昭和31年度調査によって、創建建物が桁行95尺（約28.2m）、梁行が55尺（約16.3m）、再建建物が桁行122尺（13＋18＋20＋20＋20＋18＋13尺＝約36.2m）、梁行56尺（13＋15＋15＋13尺＝16.6m）と推定されました。

3．創建建物が南北二面廂建物（切妻）で、四面廂建物（寄棟もしくは入母屋）に建て替えていると想定されます。

4．創建時の基壇外装は，河原石を基底（地覆）にして、その上に瓦を積んだ瓦積基壇外装と想定されます。

5．創建時期は武蔵国分寺の創建期段階（8世紀中頃）、再建時期は9世紀中頃以降と考えられます。ただし、いずれも正確な下限年代はわかっていません。

6．講堂の廃絶については、輪型土製品が確認された基壇増設版築を壊す掘り穴から、昭和31年度調査で天聖元宝（初鋳1023年）、元祐通宝（初鋳1081年）の宋銭などが出土しており、講堂が機能を果たさなくなった時期を窺い知ることができます。

2・3−1区　講堂西側確認状況　北から（H20年度）

3−1区　礎石2−2　南東から（H20年度）

2区　創建版築土　西から（H20年度）

3−1区　再建版築土　北から（H20年度）

3−1区　創建版基壇外装　南から（H20年度）

5区　講堂東側確認状況　南から（H20年度）

3−1区　基壇上層積み土確認状況　南東から（H20年度）

2区　輪型土製品確認状況　北西から（H20年度）

## （4）平成21年度調査の主な成果

① 講堂は8世紀中頃に創建され、その後、建物全体を建て替える大規模な改修を行い、創建時の桁行5間、梁行4間の二面廂建物を、全国の国分寺でも最大級の規模である金堂とほぼ同規模の桁行7間、梁行4間の四面廂建物に再建しています。

② 建物は、創建時が桁行5間（東西約28.5m）、梁行4間（南北約16.6m）で南北二面廂の切妻造の屋根と考えられます。再建時は、桁行7間（東西約36.2m）、梁行4間（南北約16.6m）の四面廂建物で、屋根は入母屋造（もしくは、寄棟造）になります。

③ 基壇は、創建、再建ともに瓦積基壇外装です。創建時は、場所により基底となる部材が異なり、東面は河原石が主体で、一部女瓦片、西面南側は完形の男瓦、西面北側では女瓦片が使用されています。基底部の上に女瓦や男瓦が積まれます。基壇規模は東西約34.4m、南北約22.6m。

再建基壇外装は、塼を基底（地覆）にして、その上に瓦片を積んだ瓦積基壇外装で、基壇規模は東西約42.2m、南北約22.6mです。

④ 再建講堂の階段の構築土が、基壇の南面と北面のそれぞれ中央で確認されました。規模等は不明確で、残存状況から、おおよそ建物中央間一間分の幅で設置されたと考えられます。

⑤ 再建時期は、増築部の版築層の出土瓦（昭和31年度調査）や再建瓦積基壇外装に、塔跡1が再建される9世紀中頃の瓦が見られるため、それ以降に比定されます。その要因としては、まだ、不明ですが、弘仁9（818）年、元慶2（878）年の地震による被災の可能性も想定されます。

⑥ 講堂の廃絶に関して、焼土を含む層が基壇の周囲で確認され、注目される事象です。基壇は、中世以降と想定される掘り穴に壊されており、この頃には機能を失っていたと想定されます。

## （5）主な発見遺構と出土遺物

地表下約0.2m～0.8m（講堂基壇部分は昭和47・48年度整備盛土）で遺構確認を行い、SB218講堂跡、不明掘り込み1、小穴多数などが検出されました。

出土遺物は、瓦塼類を中心に、須恵器、土師器等の土器類、鉄釘等の鉄製品等が出土しました。

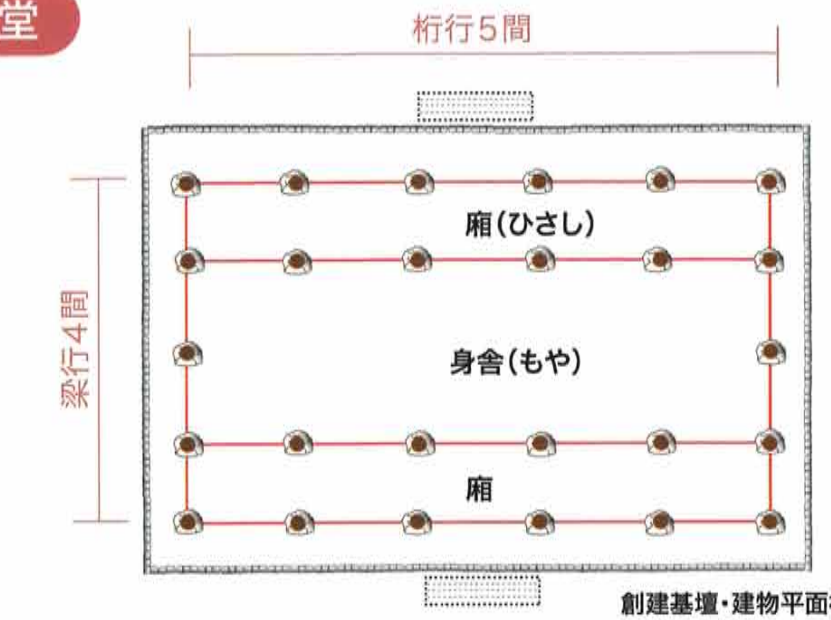
### SB218講堂跡

**礎石**　礎石は比較的大きな破片も含め、基壇上やその周囲において、昨年度調査で確認された11個に加え、本年度は8区北端で新たに1個が確認されました。現時点で講堂周辺に礎石が12個確認され、原位置を保っているのは、礎石8-4と、未調査の礎石1-1で、礎石2-2は割れてはいるもののほぼ原位置を留めていると想定されます。

礎石8-4や礎石据付堀方4-2の西で確認された礎石に、被熱したと思われる痕跡が見られました。

5区　礎石8-4　西から

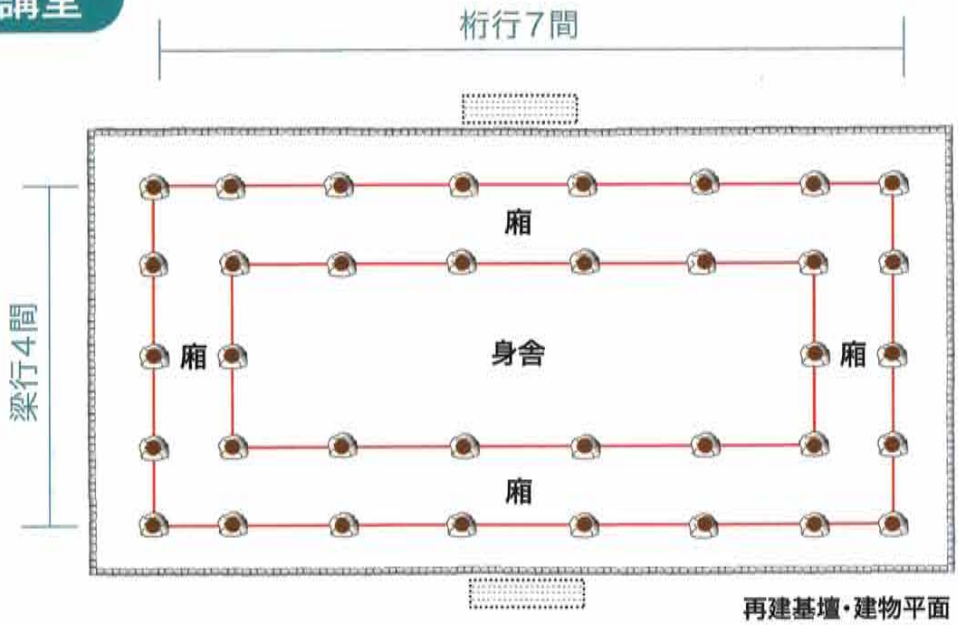
## 創建講堂




創建基壇・建物平面模式図
※階段は未確認

創建基壇断面模式図

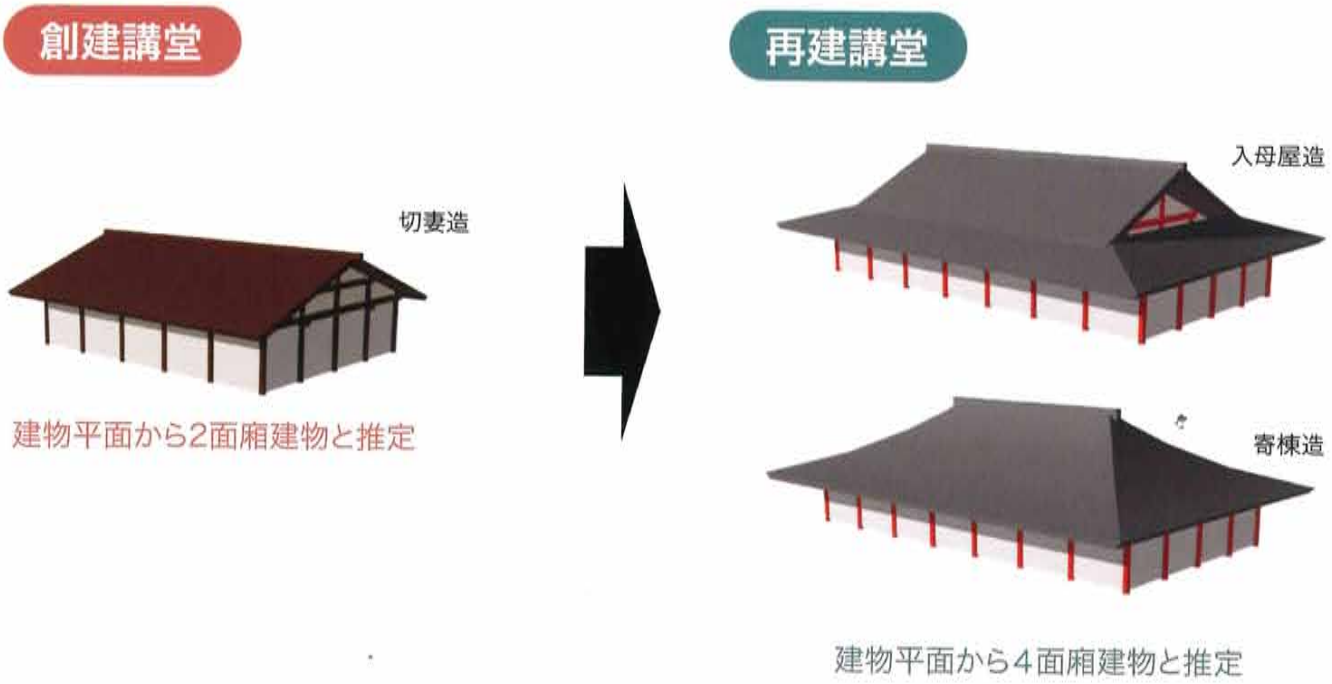
## 再建講堂



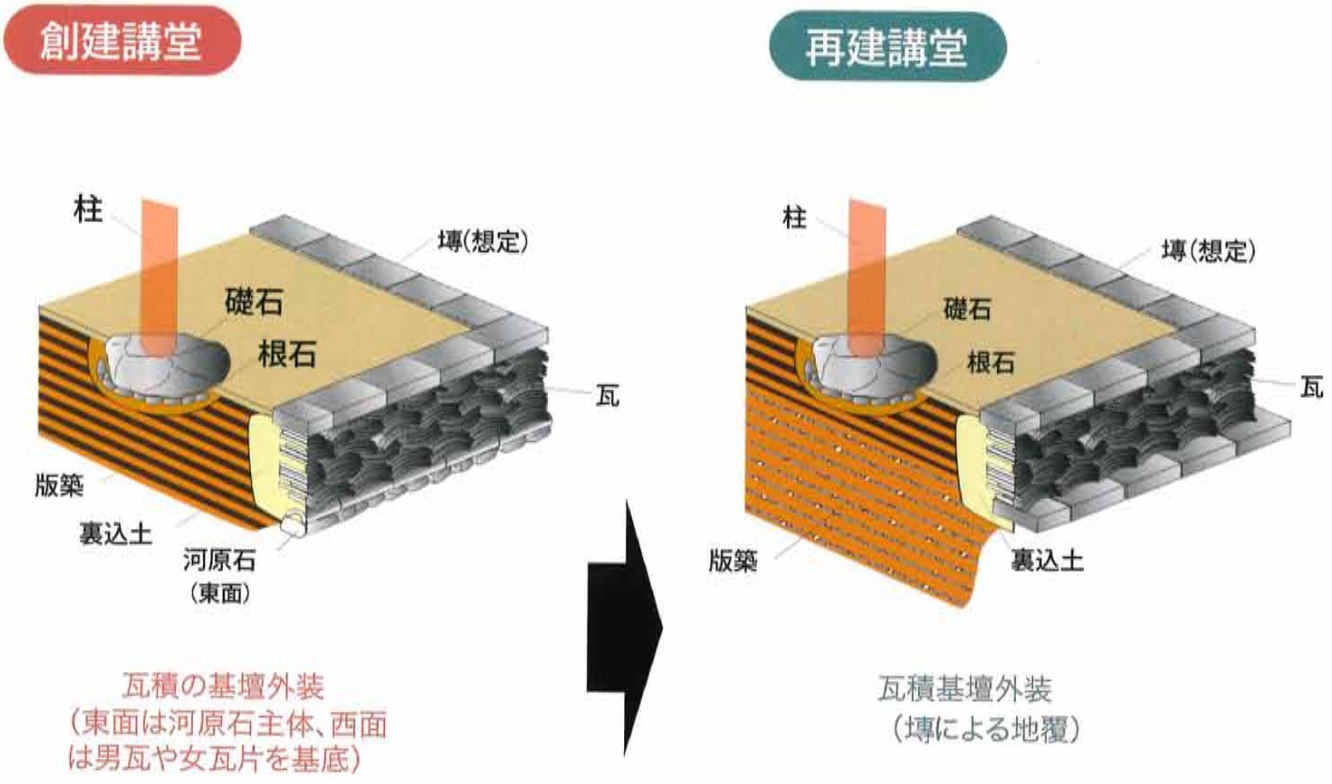

再建基壇・建物平面

再建基壇断面

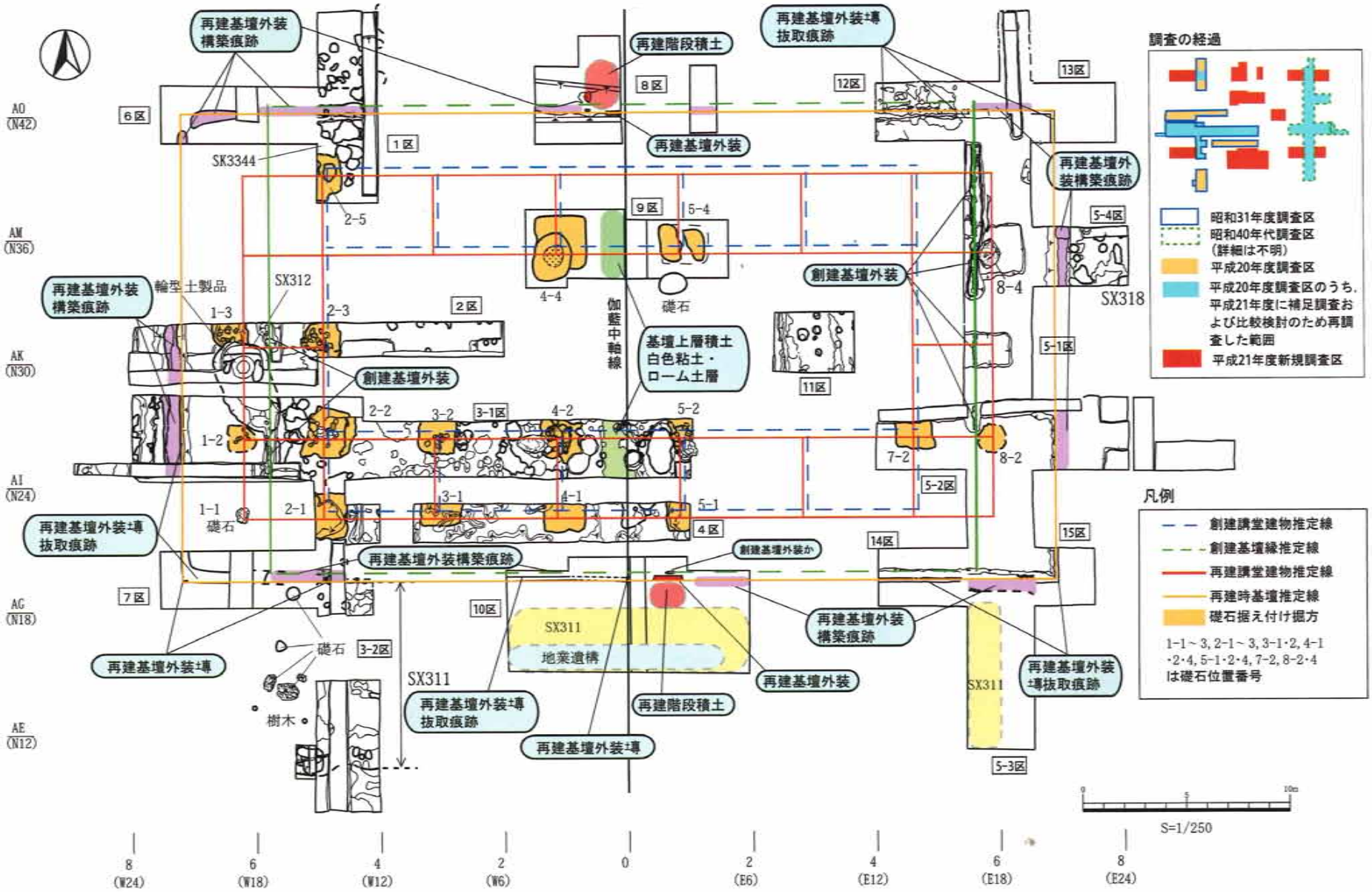
講堂基壇・建物平面模式図および基壇断面模式図




**創建・再建講堂建物模式図**




**創建・再建講堂基壇構造模式図**


再建基壇外装構築痕跡
再建階段積土
再建基壇外装土壇抜取痕跡
再建基壇外装
再建基壇外装構築痕跡
創建基壇外装
再建基壇外装構築痕跡
輪型土製品
再建基壇外装土壇抜取痕跡
再建基壇外装構築痕跡
創建基壇外装か
再建基壇外装構築痕跡
再建基壇外装土壇
再建基壇外装土壇抜取痕跡
再建基壇外装
再建階段積土
再建基壇外装土壇
再建基壇外装土壇抜取痕跡
基壇上層積土
白色粘土・
ローム土層
伽藍中軸線
SK3344
SX312
SX311
SX318
地業遺構
礎石
樹木
6区
1区
8区
12区
13区
9区
5-4区
2区
11区
5-1区
3-1区
5-2区
4区
14区
15区
7区
10区
3-2区
5-3区
AO (N42)
AM (N36)
AK (N30)
AI (N24)
AG (N18)
AE (N12)
8 (W24)
6 (W18)
4 (W12)
2 (W6)
0
2 (E6)
4 (E12)
6 (E18)
8 (E24)
S=1/250
調査の経過
昭和31年度調査区
昭和40年代調査区
(詳細は不明)
平成20年度調査区
平成20年度調査区のうち、平成21年度に補足調査および比較検討のため再調査した範囲
平成21年度新規調査区
凡例
創建講堂建物推定線
創建基壇縁推定線
再建講堂建物推定線
再建時基壇推定線
礎石据え付け掘方
1-1～3, 2-1～3, 3-1・2, 4-1・2・4, 5-1・2・4, 7-2, 8-2・4は礎石位置番号

講堂地区 全体概略図

講堂跡調査区全景

**礎石据え付け痕跡**　昨年度に確認した礎石 1-2・3、2-1・3・5、3-1・2、4-1・2、5-1・2 に加え、本年度は、9 区において、礎石 4-4 と 5-4 の位置で礎石据え付け痕跡が検出されました。なお、5 区の礎石 8-1・3・5 の位置については、再度精査を行いましたが、礎石据え付け痕跡は確認されませんでした。

礎石 4-4 据え付け痕跡は、方形と略円形との切り合う 2 つの礎石据え付け掘方が確認されました。新旧関係は方形→円形の掘方の順で、時期差と想定し前者が創建、後者が再建の礎石据え付け掘方と考えられます。創建の礎石据え付け掘方は、一辺が約 2.5mの正方形（深さは約 15 ～ 20 ㎝）で、根固め石は残存していませんでした。再建の礎石据え付け掘方は、創建時に対して南西に位置し、長径約 2.4m、短径約 1.8mの略円形で、根固め石が明瞭に残存し、埋め土内には瓦が混入しています。礎石を据え直しているこ

9 区　礎石 4-4 据付状況　西から

とが想定されることから、建物全体におよぶ大改修であったと推測されます。

なお、この再建礎石据え付け掘方と、原位置を留める礎石据え付け痕跡とにより、建物を復元すると、方形の礎石据え付け掘方心をもとに復元される創建建物位置と比較して、南西に柱位置がずれることがわかり、4-4の新旧2時期の据方との位置関係と符号します。ただし、その他の据え付け痕跡では、新旧2時期掘方は明確に確認されていません。

**創建基壇外装**　創建基壇外装は昨年度、河原石を基底として、その上に、男瓦、女瓦を重ねる瓦積基壇外装と報告しましたが、この点について、すべて統一した構造でないことが判明したので修正します。

基壇西面の3-1区では基壇外装の男瓦列の下層には、石やその他の部材は無く、男瓦が最下層（基底部）にあることが判明し、また、基壇西面北側にあたる6区では、基底部分に女瓦片を5～6枚程度重ねた状況が確認されました。昨年度調査した2区では、女瓦片を基底として、その上に男瓦を積んだ状況が看取でき、東面基壇外装と異なり、西面でも場所により部材の積み方が異なることがわかりました。基壇南面の10区において、再建基壇外装の内側に、一個体ですが、男瓦が長軸を基壇縁に平行に据えられた状態で確認され、その西側延長上には、構築土に男瓦が据え付けられた痕跡が見られ、基壇西面の3-1区の男瓦列と同様の状態が想定でき、創建基壇外装の残存の可能性があります。

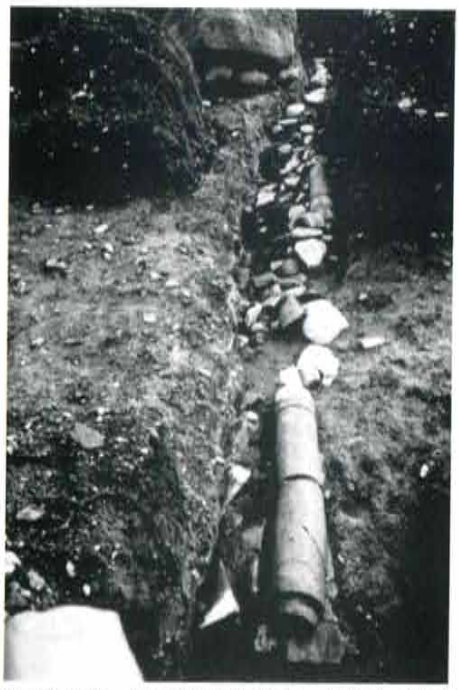
基底部の上の瓦の積み方も様々で、3-1区では基底となる男瓦の上に女瓦、2区では女瓦の上に男瓦、5区は河原石の上に男瓦や女瓦を積み、完形の男瓦を1列にして並べる手法は類似しています。

3-1区　創建期基壇外装　南から

3-1区　創建期基壇外装断割り部　西から

2区　創建期基壇外装　北から（H20年度）

6区　創建期基壇外装　北から



昭和40年代　講堂跡調査風景（5区）北から

5区　創建期基壇外装　北から

創建基壇外装が南面では遺存し、北面では遺存していない理由としては、再建時に建物とともに基壇も南に位置をずらした結果と想定されます。

創建基壇外装の瓦は武蔵国分寺跡創建期と想定され、このうち、有段男瓦に着目すると南比企窯跡群産が大半を占め、凸面は縦位に縄叩き後に調整されています。南比企窯跡群での有段男瓦の生産はＩｂ期（8世紀中ごろ）と想定されるので、従来通り、講堂の造営はＩｂ期に入ってからと考えられます。

**再建基壇外装**　再建基壇外装は塼を基底として、その上に瓦を積んだ瓦積基壇外装であることが判明しました。

検出されたのは、南面中央（10区）と北面中央（8区）で、薬師堂へ通じる南北の薬師道があった場所にあたります。遺構が良好な形で残存した理由として、お寺の参道が後世に道路へと踏襲されたことと、階段の積み土があったため、後世の攪乱が及ばなかったことが挙げられます。

8・10区ともに、一部，階段部分の積み土を断割り、

10区　再建基壇外装南面　南西から

基壇外装の正面を確認し、8区で良好な状態が確認できました。

8区（北面）は、幅約0.5m、高さは約0.35mで、9～11枚程の瓦が積まれた状況が確認できました。東側は調査区外に外装は伸びますが、8区東側のトレンチでは未検出であり、最大で幅4m程度残存している可能性があります。この瓦積基壇外装は、塼を基底としており、塼の前面（正面側）より5cm程度、奥（南）にずらして瓦を積みます。これは、南面も同様で地覆としてのあり方を意識しているようです。瓦積に使用される瓦は女瓦が主体で、男瓦や文様面を正面に向けた唐草文宇瓦が見られます。積み方は概略、下から凸面を上にして3枚重ね、その後は、凹面を上にして1～

10区　再建基壇外装南面　南から

8区　再建基壇外装　北から

２枚、次に凸面を上にして１～２枚を重ね、以上その繰り返しで、隙間なく積まれています。基壇高が約 90 ㎝と想定すると、30 枚程度積まれたことになります。

10 区（南面）では東西幅約 1.6m、高さ約 0.3m で、塼の上には８枚程度の瓦が積まれた状態で確認されました。この他、基底の塼は７区の基壇南西隅（１点）、10 区のベルト西側（２点）などで確認されています。

８区　再建基壇外装北面　北西から

使用される瓦は、創建期から塔再建期（9 世紀中頃）のものが確認され、再建されるまで建物に葺かれていた瓦を再利用したものと想定されます。また、塼は創建期に生産されたものを再利用したと想定されます。

基壇外装設置工事は、基壇縁を溝状に掘り込み、瓦も入れて埋め戻し、その上に塼を設置しています。外装の裏込土にも瓦や塼が含まれます。

なお、創建・再建ともに雨落の施設は未検出です。

5-3 区　再建基壇外装構築状況断面　西から

８区　再建基壇外装北面構築状況断面　西から

７区　再建基壇外装南西隅塼および抜取り痕跡　北から

10 区　再建基壇外装南面　近影

15区　再建基壇外装南東隅塼の抜取り痕跡　東から

14区　基壇外装南面塼の抜取り痕跡　南東から

**塼の抜取り痕跡**　再建基壇外装の基底とされた塼を抜取った痕跡（据え付け痕跡）が、3-1・7・10・12・13・14・15区で確認されました。瓦積基壇外装と合わせ、これらの検出によって、再建時の基壇規模や位置を確定させることができました。

**基壇積み土**　基壇上層において、昨年度に3-1区で確認した白色粘土層を、9区においても地表下約0.2mと非常に浅いレベルで確認しました。さらに、白色粘土層の上層で一部ローム土層が検出され、基壇上層の状況が確認できました。白色粘土層の時期は明確ではありません。ローム土層上面は、一部被熱していました。

13区　基壇外装北東隅塼の抜取り痕跡　東から

**掘り込み地業**　版築や掘り込みの深さは昨年度報告の通りです。再建期の掘り込み地業は5区において、東側増築部分の南北規模が、約28mに及ぶことがわかりました。再建基壇縁からの距離は、北端が北へ約4m、南端が南に約1.5mと範囲が異なります。創建時の地業の東西規模は、増築基壇により壊されて不明確ですが、基壇東面では創建基壇縁から少なくとも東へ約3mの範囲に広がっています。

9区　基壇上層積み土確認状況　南から

**再建建物**　桁行7間、梁行4間の四面廂建物で、礎石や礎石据え付け掘方、基壇外装の位置などを考慮し、以下の通りに復元され、金堂とほぼ同規模です。

桁行7間（13尺＋18尺＋20尺＋20尺＋20尺＋18尺＋13尺＝122尺＝約36.2m）

梁行4間（13尺＋15尺＋15尺＋13尺＝56尺＝約16.6m）

軒の出は基壇外装を基準とすると東西南北面ともに約10尺を測ります。

**創建建物**　桁行5間、梁行4間の南北二面廂建物です。再建期に比べて建物位置や規模を確定する要

素が少ないですが、礎石据え付け痕跡と基壇外装の位置などから推定し、以下の通り復元しました。

桁行５間（18尺＋20尺＋20尺＋20尺＋18尺＝96尺＝約28.5m）

梁行４間（13尺＋15尺＋15尺＋13尺＝56尺＝約16.6m）

再建建物との相違点は、妻側（東西端）の各１間分の有無だけで、その他の柱間寸法はほぼ同じと想定されます。軒の出は基壇外装位置を基準とすると、おおよそ10尺と推測されますが検討を要します。

**基壇規模**　再建基壇は瓦積基壇外装および基底部の塼の抜取り痕跡から東西約42.2m、南北約22.6mを測ります。創建基壇は、基壇外装から東西が約34.4mで、南北は約22.6mと推定されます。

**再建階段**　８・10区で階段の積み土が検出されました。ともに瓦積基壇外装の前面を覆って積み土が施されており、基壇外装設置後に階段が造られています。規模や段石等の部材は不明で、10区では0.5m前後の河原石が点在しており、部材として使用されたものと想定されます。規模については、積み土の残存状況から建物中央間一間分の幅と想定されます。

10区　南面階段部分確認状況　北西から

また、８区の北階段部分の断ち割り調査では、下層から砂礫の層が確認され、階段設置の基礎工事か、または、想定される階段の出より北に延びていることから、参道の設えの可能性も想定されます。南面については、この状況は未確認ですが、調査区の南端に南北幅２m以上、東西10m以上のローム土を主体とした版築状の地業が確認されました（西、南側は調査区外に伸びる）。この地業は、階段の積み土と直接切り合い関係は見出せませんが、階段と関連する施設や参道敷き等が想定されます。

８区　北面階段積土断割り断面　北西から

８区　北面階段積土断割り断面　西から

10区　地業遺構確認状況（北西から）

10区　地業遺構断面　西から

**整地層・焼土層**　ほとんどの調査区で基壇周囲に整地層が検出されました。この上層に焼土を多く含む層があり、廃絶時の状況を示す痕跡として注目されます。

### SX311・318 不明掘り込み

SX311 は昨年度 3-2 区で確認された土採り穴と想定される大規模な掘り込みで、5-3・10 区で検出されました。5-3 区で東端を確認し、西端は不明なものの中軸線を挟んで同規模であれば、南北約 9 m、東西約 37mを測ります。

SX318 は昨年度、基壇の東（5 区）で検出された土採り穴と想定される掘り込みで、15 区で整地層の下層で検出されました。これと対となる基壇西側の SX317 不明掘り込みは、6 区では撹乱を受け、7 区では整地層が広がっており、南北方向の遺構の広がり不明で，東西幅は 3-1 区において約 4 mを測ります。

## （6） 小結

昭和 30・40 年代に行われた調査と合わせ、今回の調査により、史跡整備に向けて、遺構復元の多くの情報を得ることができました。

講堂跡の再建は大規模なもので、創建基壇を利用しつつ基壇を増築し、建物や基壇外装を新たに造り替え、また、創建期よりも大きく、格式の高い建物にしています。このような 9 世紀後半頃における武蔵国分寺の整備・拡充状況が明らかとなったことの意義は大きいと言えます。武蔵国分寺の総合的な理解が深まるように、伽藍全体を含めて再建の要因や歴史的背景を検討していきます。

9区　調査区全景　西から

11 区　調査区全景　北から

10区　調査区全景　北から

6区　作業風景　東から

8区　調査区全景　南から

7区　作業風景　西から

5・14・15区　再建基壇南東隅　東から

5・12・13区　作業風景　西から

# 金堂地区の調査

## （1）調査区の概況

金堂跡は、明治36年に重田定一らによって表面観察による礎石の分布調査がなされ、大正11年には東京府により，国史跡と指定される際に分布調査が行われました。

その後、昭和31年に日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会により、武蔵国分寺跡で初めての本格的な発掘調査が実施され、建物規模や構造、基壇の規模や構造、南北面に階段が設置されたことが判明しました。昭和40年度に金堂跡の東側を主体に調査が行われており、礎石の据え付け状況や基壇東面の外装部分が確認されています。

昭和31年度金堂調査遠景　南から

昭和31年度金堂調査風景　北から

## （2）調査の目的

主に昭和31年度の金堂跡の調査区を対象に、下記の項目を明らかにする目的で調査を行います。

①建物位置・規模・礎石据え付け状況の確認。

②基壇位置・規模・構造の確認（基壇上面・須弥壇・基壇外装・雨落ち溝・掘り込み地業部などを含む）。

③北面階段の確認。

④僧寺伽藍中軸線を確定させる情報を得る。

⑤堂間通路などの未確認遺構の位置・規模・構造の確認。

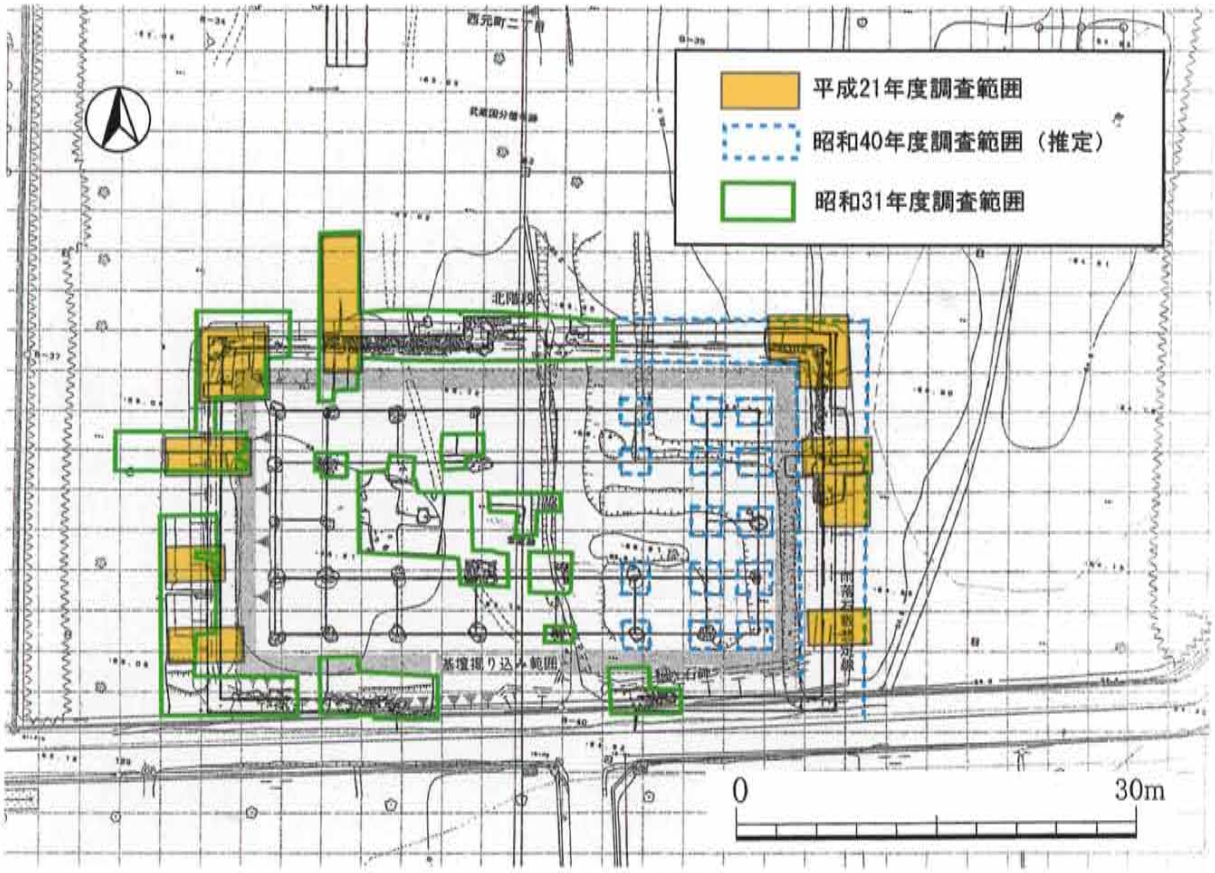
⑥金堂造営時期の確認。

⑦基壇、基壇外装、建物などの改修・増築・再建の可能性の確認。

## （3） 調査状況

本年度は、調査区の設定と周辺の測量を行い、基壇外装にあたる部分について、表層部分の掘削（深さ約 0.2m）を行いました。基壇範囲内は，昭和 40 年代の整備盛り土（ローム瓦礫混入土）がなされ，講堂跡と同様の状態であることを確認しました。

来年度に本格的に発掘調査をする予定です。




金堂地区全体図

金堂跡北東部分掘削状況　北から

金堂跡南西部分掘削状況　南西から

国指定史跡　武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡
－平成 21 年度
　保存整備事業に伴う事前遺構確認調査－
発行日　平成 23 年 3 月 31 日
編著者　国分寺市遺跡調査団
　　Ⓒ(団長　坂誥　秀一)
発行所　国分寺市教育委員会
　　(ふるさと文化財課)
　　〒185-0023 国分寺市西元町 1-13-10
　　(武蔵国分寺跡資料館内)
　　TEL 042-300-0073
印刷所　株式会社天章堂

令和４年（2022）８月16日　デジタル版作成